

SHOW-HEYシネマルーム

★★★

青の稲妻

2002年・中国、日本、韓国、フランス映画・112分
配給/ビターズ・エンド、オフィス北野

2004（平成16）年6月30日鑑賞
＜シネ・ヌーヴォ・中国映画の全貌2004＞



監督・脚本：賈樟柯（ジャ・ジャンクー）

出演：趙濤（チャオ・タオ）／趙維威（チャオ・ウェイウェイ）
／呉（王京）（ウー・チョン）
／李竹斌（リー・チュウビン）
／周慶峰（チョウ・チンフォン）
／王宏偉（ワン・ホンウェイ）

みどころ

改革開放政策がドンドン進み、若者の感覚も激変していく2001年の中国。山西省の地方都市大同（ダートン）を舞台に、揺れ動く19歳の男女を主人公に描いた話題作。『任逍遥』を歌い、アメリカばりの反体制（？）を気どる若者だが、その行きつく先は・・・？中国にも、こんな映画があるのかとビックリする、何ともやり切れない「無力感」いっぱいの映画の評価は・・・？

＜大同（ダートン）というまち＞

大同は、中国西北部の山西省の最北にある都市。そのすぐ北は内蒙古自治区だから、今は内蒙古観光への玄関口として有名。しかし、大同が多くの観光客を引き寄せているのは、ユネスコの世界文化遺産に登録されている雲崗石窟。大同のまちは、紀元398年、鮮卑（せんひ）族の拓跋（たくばつ）氏が、ここを北魏王朝の都としたことから発展した。そして、この鮮卑族が残したのがこの雲崗石窟。鮮卑族による北魏王朝は、漢民族による王朝ではなかったため、秦や漢の時代の中国のイメージとは大きく異なり、遊牧民族の趣きがあるのが、この雲崗石窟の特徴。

この映画は、こんな中国の地方都市を舞台としたもの。したがって、スクリーンに再三登場するのが、「モンゴル王酒」のキャンペーン風景というのも、この地理的背景を理解すれば、十分うなずけるというものだ。

＜2001年の中国をめぐる状況は？＞

この映画が描くのは、2001年という時代の中国。1949年の新中国建設から50年余りの間に、中国は文化大革命の悲劇を経て、改革開放政策へと大きくカジを切りかえ

だが、13億という人口と巨大な国土を抱えた中国は、当然さまざまな問題点を内包している。

この時代状況を強調するため、映画の中で意識的に観客に聞かせているのが、テレビやマイクで語られるさまざまな出来事。その出来事とは、①中国のWTO加盟、②天輪功の狂信者による天安門広場での焼身自殺、③海南島での米軍機と中国機との衝突事故(事件)、そして④2008年の北京でのオリンピック開催の決定など。さらに、私たち日本人が知らない出来事は、⑤中国北部での失職した工場労働者による社員宿舎の爆破事件や、⑥大同と北京を結ぶ高速道路の開通など。

前述のように、大同のまちは北京よりむしろモンゴルに近いが、高速道路が開通すれば、北京はより身近な都市になること確実。

＜ちなみに、大原というまちは？＞

なお、映画の中に大原(だいげん)という山西省の省都のまちな名前が登場する。この大原は、紀元前497年の晋の時代から、歴史にたびたび登場する交通の要所であり、また、唐代の詩人の白居易や、『三国志演義』の作者の羅貫中などが大原の出身とのこと。

私がなぜ、この大原を知っているのかというと、大原から日本に留学していた親しい中国人の女子学生のS嬢がいたから。S嬢は、2004年3月、大学を卒業して日本の企業に就職したが、卒業の機会に、大原からその両親が大阪を訪れ、S嬢の親しい友人たち10数名と共に、何回も楽しい時間を過ごした経験がある。

北京と西安のちょうどまん中あたりにあるこの大原は、日本人のツアー旅行地としてはあまり有名ではないが、是非1度は行ってみたいところ。おっと、話が脇道にそれってしまったようだ。

＜2人の主人公は19歳＞

大同に住んでいるビンビン(趙維威)とシャオジイ(呉[王京])は共に19歳。2人は親友だが、シャオジイは定職なし。そして、ビンビンも勤め先をクビになったが、それを母親に言えないまま。2人ともバイクを乗り回したり、ビリヤード場で時間をつぶしたり、19歳の若者のクセに(?)、特にすることもなく、ブラブラと無為の毎日を・・・。

2001年という時代の中国においては、大同という地方都市でも、スピーカーから流れる宝くじのアナウンスは否応なくマナーへの夢をかき立て、「金がすべて!」の中国社会の到来を告げているよう。しかし、「自由の国」「民主主義の国」アメリカとは異なり、「共産党の国」中国においては、いかに改革開放政策が進もうとも、19歳の若者が自由に飛び立てる土壌など、どこにも存在しない。シャオジイが熱っぽく語る、昨日観たアメリカ映画のように現実はいかないのだ。そんな彼らが歌う歌は『任逍遥』。これは、すべての束縛から解放されて自由になるという意味の歌で、荘子の『逍遥遊』に基づいた曲。そして、

その意味するものは結構過激。日本で言えばさしづめ、1960年代の大学紛争時代に、あの高倉健さんが歌った有名な『唐獅子牡丹』か・・・？

<ビンビンの恋人は？>

ビンビンには、同級生の恋人ユエンユエン（周慶峰）がいるが、どうもこの2人の仲はぎこちない。これには、ユエンユエンがお嬢様で、北京の大学を志望しており、「もうすぐ受験だから、しばらく会いにこないで」と告げるような、超真面目なタイプであることも1つの原因。2人のデートの場所は、もっぱらビデオルーム。個室の中、2人でビデオを見ながらしゃべったり、ちょっと乗ってくると『任逍遥』を手をつないで歌ったりという清い(?)関係で、キスさえしたことがない・・・。



【青の心】
アーティストフィルムよりDVD発売中

<ヒロインもちょっと変わりモノ>

他方、シャオジイがホレたのが、「モンゴル王酒」のキャンペーンで踊っていたモデルのチャオチャオ（趙濤）。シャオジイは、「友達になって」と話しかけるが、チャオチャオはこれを無視。「子供に何がわかるの!」という雰囲気だ。

チャオチャオには、37歳になるヤクザの愛人チャオサン（李竹斌）がいる。後にわかることだが、このチャオサンは高校時代のチャオチャオの体育の教師。高校の教師と生徒という「禁断の恋」が、中国で許されるはずがない。学校を追われ、駆け落ち(?)した2人のなれの果てが今の姿なのだ。「こんな苦勞が、19歳のお前にわかるか!」とチャオチャオは言いたいわけが、そんなことを言ってもシャオジイにわかるはずがなく、チャオ

チャオはイライラするだけ。

しかし、どこまでもシャオジイが執拗に自分を追い求めてくれば、やはりうれしいのが女心というもの。病院でもめていたチャオチャオをビンビンとシャオジイの2人が手助けしてくれたことによって、一転してシャオジイとチャオチャオはいい雰囲気。そして、チャオチャオはシャオジイを「弟にしてあげるわ」と・・・。

今までの中国映画には登場しない、ちょっと変わったキャラクターのヒロインの登場にビックリ。

＜シャオジイとチャオチャオの仲は・・・？＞

最初は19歳の「ガキ」の登場にも、イキがって、チャオチャオに対して「キスしてやれよ」と余裕を見せていた(?)チャオサン。しかし、チャオチャオとシャオジイの仲が親密になってくると、そこはやはり許せないのが男というもの。男の、そしてヤクザのメンツにかかわるとばかりに、シャオジイを痛めつけ、チャオチャオもしばりつけようとするチャオサン。

しかしそんな時、この映画は、何も脈絡もないまま、あっけなくチャオサンは交通事故で死んでしまった。これを聞いて、「長生きは無用だ。30歳まで生きればいい!」といきがるシャオジイだが・・・?

＜ビンビンの進路は・・・？＞

仕事に行っていないことが母親にバレたビンビンは、母親から「軍隊にでも行ったら!」と半分見放された状態。そんなビンビンも、恋人のユエンユエンが北京の大学に行くことが決まったため、自分も軍隊に入れば北京に行けると考え、入隊するべく健康診断を。

すると、そこで判明したのが、肝炎にかかっているというおそろしい事実。「感染力が強いから恋人にも用心しろ」と言われたビンビンは大ショック。北京に行くユエンユエンに携帯をプレゼントしたものの、「これからはすぐに連絡できるね」とユエンユエンから言われても、「これからはないよ」と答えるだけ。さらに、このお姫様(?)が意を決して、「キスして」と迫ってきているのに、ビンビンは何もできないまま……。ホントに今時の若者は、何と軟弱なのだ……!

＜何とも突飛な行動は?＞

こんな無気力、無目的状況のビンビンとシャオジイの2人が、頭の中で描いた、カッコいい行動。それは、何とアメリカ映画で観たような銀行強盗だ!死んだチャオサンが持っていたピストルを使ってこれをやるのかと思って観ていたら、そうではない。何と上着の下に隠して身につけた(インチキ)爆弾を、銀行員に示して、「俺は爆弾を持っている。金を出せ。さもないと自爆するぞ!」という方式(?)のチャチなもの。

鏡の前の2人の予行演習はバッチリ……。バイクの運転席で待つシャオジイを残して、ビンビンはいよいよ銀行の入口に。そして、ドアを開けて本番(?)にのぞんだが……?

<賈樟柯(ジャ・ジャンクー) 監督とは>

2002年に公開され、カンヌ国際映画祭コンペティション部門に正式出品されたこの映画の監督は、1970年生まれのジャ・ジャンクー。ジャ・ジャンクーは、陳凱歌(チェン・カイコー) 監督の『黄色い大地』(84年)を見て、映画に関心を持ち、1993年に北京電影学院に入学し、1997年の卒業後、①『一瞬の夢』(98年)、②『プラットホーム』(00年)で注目された若手監督。

そして、この『青の稲妻』は、その長編第3作。私は、『一瞬の夢』も『プラットホーム』も観ていない。しかし、パンフレットだけは購入してこれを読んだが、その感性は、当然ながらこの『青の稲妻』と全く同じもの。

この映画における19歳の主人公たちの感覚や、37歳のヤクザ男の感覚は、このジャ・ジャンクー監督にはすべて当然のことなのだろうが、中国映画としては極めて異質のもの。

そして、パンフレットによると、この『青の稲妻』も、第2作の『プラットホーム』と同様、「中国政府の検閲を通すことなくつくられた」ということらしい。中国では、ひと昔前は、張藝謀(チャン・イーモウ) 監督の『菊豆』(90年)や『秋菊の物語』(92年)、そして、田壯壯(ティエンチョワンチョワン) 監督の『青い罌』(93年)など、上映禁止となる秀作が多かったが、近時は検閲を通さないまま、「個人的に主張する」途がある、というのはちょっとした驚き。もっとも、それがどんなシステムなのかは、パンフレットを勉強しても私にはよくわからないが……。

<「無気力」と「タバコ」が印象的>

若手監督が、2001年という現代の中国の地方都市における若者の無気力、無力感を描いたこの映画は、その狙いどおり、無気力が充満……!

第一線での仕事を毎日頑張ってやっている、日本の団塊世代に属する55歳の私としては、こんな映画を観ているとイライラしてくるが、もちろんこの映画には、それなりの主張がある。しかし、「おい、若者よ!何とかしろよ……!」と思うのは、果たして私だけだろうか……。

もう1つ思うのは、この映画では、19歳の若者たちも37歳のヤクザのチャオサンのタバコを吸うシーンの多いこと。1つのシーンには必ずと言ってもいいほど、タバコに火をつけ、これを吸うシーンがある。セリフをしゃべるよりも、タバコの火をつけたり、これを吸うことによって伝えるモノがあることは確かだが、ちょっと度を越しているのでは……?